

## 【記 事】

# 第 91 回成医学会青戸支部例会

日 時：平成 15 年 12 月 13 日（土曜日）

会 場：東京慈恵会医科大学附属青戸病院  
第二別館 4 階 会議室

## 【特別講演】

### 性器ヘルペスの診断と治療

皮膚科 本田まりこ

性器ヘルペスは性器にみられる単純ヘルペスウイルス（herpes simplex virus, HSV）1 型または 2 型の感染症で、外陰部に小水疱やびらんを形成する疾患である。HSV は感染後感染部位の末梢神経より侵入し腰仙髄神経節に潜伏感染する。潜伏感染した HSV は何らかの誘因によって再活性化し、神経を下行して粘膜や皮膚に達しその部位に病変を形成する。性器ヘルペスは臨床的に初感染による初感染性器ヘルペス、潜伏ウイルスの再活性化による再発型性器ヘルペス、免疫抑制薬の使用など何らかの原因で免疫抑制状態になった時に潜伏していた HSV が再活性化して初めて病変が生じる非初感染初発型（誘発型）とに分類されている。近年、若い女性の罹患率が高くなり、その対策が急がれているが、一度感染したウイルスは取り除くことはできない。

今回、性器ヘルペスについて概説する。

## 【一般演題】

### 1. 当科における肺癌外来化学療法の現状

呼吸器内科 館野 直・望月 英明  
木村 啓・小林 政司  
児島 章

目的：当科での肺癌患者の入院期間の短縮および QOL の向上を目指した外来化学療法の現状について検討した。

方法：2002 年 7 月から 2003 年 10 月までに外来化学療法を施行した 22 例を対象とした。

成績：内訳は男性 16 人、女性 6 人、年齢は 40 歳～84 歳、平均年齢は 64.4 歳であった。組織型は、

腺癌 10 例、扁平上皮癌 9 例、不明（非小細胞肺癌）2 例であり、悪性胸膜中皮腫が 1 例であった。手術非適応 21 例、術後再発 1 例であった。外来化学療法導入の Performance Status は PS1 13 例、PS2 8 例、PS3 1 例であった。使用薬剤は GEM 単剤 5 例、VNR 単剤 8 例、GEM+VNR 6 例、TXT 単剤 9 例であった（重複あり）。原則として 1 クール目は副作用の確認のため入院加療とした。観察された副作用は、貧血、白血球減少、血小板減少、肝障害、肘関節痛、胸部違和感、微熱、頭痛、ほてりなどがあつた。外来化学療法中に副作用が重篤で入院が必要となることはなかつた。最初は PR や NC であっても回数を重ねるごとに PD となり化学療法が中止となる例が多かつた。

結論：全身状態の比較的良好な患者を選択し、比較的安全に外来化学療法が施行されていた。医療費削減、在院日数短縮、QOL の向上には充分に貢献するものと考えられる。

### 2. 成人病検診にて偶然発見された自己免疫性肝炎の 1 女児例

小児科 中村 裕子・吉成 聡  
横井 貴之・阿部 法子  
久保 明子・黒川 直清  
柴田 淳・坂口 直哉  
津田 隆・白井 信男

今回成人病検診にて偶然発見された自己免疫性肝炎の 1 女児例を経験したので報告する。

症例は 12 歳女児。成人病検診にて肝機能障害を指摘され、精査加療目的に来院した。入院後 A 型肝炎が最も疑われたが、血液検査にて A 型肝炎の抗体は陰性だった。その他 EB ウイルスの感染症を疑ったが、総蛋白高値もあり、また、IgG 値の高値、抗平滑筋抗体 80 倍、抗核抗体 40 倍と自己抗

体が陽性であったため、自己免疫性肝炎を疑い、エコー下肝生検を行なった。病理診断にて自己免疫性肝炎と診断し、それまでは、強力ネオミノファゲン、補液、安静にて肝機能の改善を期待していたが、AST/ALT 値の改善傾向認めず、確定診断後ステロイド内服治療(PSL 30 mg/日)(0.5 mg/kg/日)を開始した。ステロイド内服治療 2 週間にて AST/ALT は 90 台/200 台へ低下したため、ステロイドの減量を行い、その後増悪傾向がないことを確認し退院、外来通院とした。今回成人病検診が本症例の早期発見に有効であったと考えられた。

### 3. 当院における平成 14 年度のインフルエンザ検出状況についての一考察

中央検査部<sup>1</sup> 安藤 隆・堀口 新悟  
齊藤 正二・小野 安雄  
平井 徳幸・今西 昭雄  
太田 眞

わが国のインフルエンザ感染は、毎年 11 月下旬から 12 月上旬に流行が始まり翌年の 1~2 月に極大となり、3~4 月にかけて減少・終息するパターンをとる。感染はおもに飛沫感染で国民の約 5~10% が感染すると言われている。しかし、流行の程度やピークの時期、流行を起こすウイルスの型など年によって異なるため、ウイルス分離は治療上必要不可欠であった。最近、インフルエンザ迅速診断キットが開発され、臨床現場においてインフルエンザの分離、鑑別が短時間で可能である。今回われわれは、診断キットの有用性・信頼性の評価および当院におけるインフルエンザ流行状況について報告する。

### 4. 消化管カポジ肉腫から HIV 感染症が発見された 1 例

<sup>1</sup>病院病理部、<sup>2</sup>外科、<sup>3</sup>内視鏡部

<sup>1</sup>酒田 昭彦<sup>1</sup>・遠藤 泰彦<sup>1</sup>  
三浦 幸子<sup>1</sup>・三角 珠代<sup>1</sup>  
根本 淳<sup>1</sup>・江間 律子<sup>1</sup>  
柵山 年和<sup>2</sup>・成宮 徳親<sup>3</sup>

消化管梅毒疑いにて、消化管内視鏡検査を受け、生検の結果、消化管カポジ肉腫と診断され、HIV

感染症が発見された症例を報告する。

症例は、60 歳、男性。糖尿病、下肢閉塞性血管炎、貧血で加療中、検診で早期食道癌が疑われ、当院外科を紹介された。内視鏡検査では癌はなく、生検で食道炎(カンジダ感染)であった。経過観察していたが、糖尿病性神経症疑い、さらに、神経梅毒・消化管梅毒疑いが出てきたため、再度内視鏡検査が施行された。食道から十二指腸、回盲部から直腸まで全長性に発赤性病変が多発しており、生検により消化管カポジ肉腫の病理診断が付けられた。紡錘形細胞と血管の錯綜性に増殖した肉芽様病変で、細胞内硝子小体を伴っていた。免疫染色では、血管内皮マーカー (Factor VIII・CD34・CD31) が陽性であった。この診断結果に基づいて、直ちに HIV 検査を実施したところ、HIV 陽性であった。その後は、HIV 感染症の治療目的で、本院に転院した。

本例は、皮膚病変を欠いた消化管カポジ肉腫で、内視鏡生検によって初めて、その基礎疾患である HIV 感染症が発見された 1 例である。

### 5. 入院患者の睡眠覚醒リズムに関する検討：せん妄患者と非せん妄患者との比較

精神神経科<sup>1</sup> 原田 大輔・石野 裕理  
林田 健一・伊藤 洋

入院患者においては不眠、せん妄等の睡眠覚醒障害や抑うつ、不安等の精神症状が高頻度に出現する。とくにせん妄を含む睡眠障害は患者の QOL を著しく低下させ、原疾患の治療にも悪影響を与える。精神科に兼科依頼された入院患者を対象とした我々の調査によれば、兼科患者の 27.7% が睡眠障害を、26.8% がせん妄を理由に兼科依頼されているという結果を得ている。睡眠障害、せん妄の出現には身体疾患の重症度以外にも日中の活動性等の多要因が関与していると考えられる。今回我々はアクチグラムを用いて日中の活動性を含めた睡眠覚醒リズムを測定し、それがせん妄の発生にどのように関与しているかを検討し、若干の知見を得たので報告する。

## 6. MRSA が同定された難治性眼瞼膿瘍の1例

眼科 °田中 格・飯野 弘之  
高濱 倫子・南部 典彦  
林 孝彰・敷島 敬悟

各種抗生物質による治療に抵抗性を示したメチシリン耐性ブドウ球菌（以下、MRSA）による難治性眼瞼膿瘍を経験したので報告する。症例は、76歳女性。左眼瞼腫脹の精査目的で当科紹介受診。初診時、左上眼瞼に疼痛を伴う発赤腫脹をみとめ眼縁に潰瘍を伴っていた。既往歴には糖尿病をみとめた。初診時施行した眼脂の細菌培養検査は陰性であった。霰粒腫、眼瞼膿瘍の診断のもとマクロライド、ニューキノロン、セフェム系の抗生剤を使用するも病変は増悪傾向を示し、一部壊死を伴い眼瞼腫脹の増大傾向をみとめた。眼瞼結膜より病変部の切開を行い、内容物の培養検査によりMRSAが検出された。MRSAに感受性をみとめた0.5%塩酸アルベカシン点眼、塩酸ミノサイクリン内服を開始したところ眼瞼病変は著明に改善し、約1カ月後には発赤・腫脹はほぼ完全に消失した。高齢者で糖尿病の合併を有するものでは、眼瞼膿瘍の起炎菌としてMRSAを考慮する必要があると考えられた。

## 7. 脳出血による脳死状態より帝王切開にて生児を得た1例

産婦人科 °福田 貴則・田中 邦治  
鈴木啓太郎・田部 宏  
森 裕紀子・西井 寛  
渡辺 明彦・落合 和彦

症例は36歳、1経妊1経産、他院にて妊婦検診を受診しており、妊娠36週より妊娠中毒症が出現していた。妊娠37週1日の早朝、自宅にて意識混濁し倒れているところを発見され、当院に救急搬送される。来院時、意識レベルIII-300、血圧180/86mmHg、脈拍70回/min、硬直性痙攣を認め、両側瞳孔は散大し、対光反射は消失していた。徐々に自発呼吸が不安定となり胎児仮死徴候を認めたため気管内挿管し緊急帝王切開術を施行、2,530gの男児を娩出した。Apgar scoreは1分後7点、5分後8点であった。術直後の頭部CTにて左側頭

部の脳出血、脳室穿破を認めた。翌日、脳波検査、聴性脳幹反射検査施行し活動波認めず脳死と診断された。発症から20日後、死亡となった。意識障害の原因として子癇を疑ったが実際は脳出血であり鑑別が困難であった症例を経験したので報告する。

## 8. A-Cバイパス手術のため両側大伏在静脈抜去後左下腿に生じた血管肉腫の1例

皮膚科 °大原 夕佳・松尾 光馬  
本田まりこ

74歳女性。約10年前の両側大伏在静脈を使用したA-Cバイパス手術後より両下腿に浮腫が見られた。2002年12月頃より左下腿に紫紅色丘疹が出現し、徐々に増加した。打撲などの既往はない。2003年1月に近医を受診し抗菌薬の投与を受けたが、腫脹および疼痛が増強したために、当科を紹介された。病理組織学的所見、免疫組織化学的所見より血管肉腫と診断した。本人および家族が侵襲的治療を希望せず、緩和的X線照射を行った。しかし、照射を行っていない下腿後面を中心に腫瘍の新生がみられ、全照射終了後21日目の胸部CTにて右下肺野に転移が認められた。再度負担にならない治療を希望され、タキソテールWeekly療法を行い多少の延命効果はあったが、癌性胸膜炎にて9月7日に永眠された。

## 9. 青戸病院脳神経外科における脊椎脊髄外傷の検討

脳神経外科 °高島伸之助・小暮 太郎  
吉野 薫・野田 靖人  
池内 聡

当院では重症頭部外傷や多発外傷が搬送されることはほとんどないため、脊椎脊髄外傷の急性期治療を行う機会は少ない。今回我々は脊椎脊髄損傷で脳神経外科に入院した症例に関して、その臨床的特徴および治療方針について検討したので報告する。

対象：脳神経外科で当直体制をとるようになった平成11年から、当科にて入院治療した急性期脊椎脊髄外傷8例を対象とした。男性6例、女性2例

で年齢は53~88歳であった。全例頸椎頸髄損傷で骨傷を伴うもの2例(C6/7, C4/5前方脱臼骨折)、非骨傷性損傷が6例であった。

結果：受傷機転としては転倒が7例(うち3例は飲酒)、交通事故1例でいずれも比較的軽微な頭部外傷であった。非骨傷性の場合、後縦靭帯骨化症・頸椎症・頸部脊柱管狭窄症などを伴っており全例中心性脊髄損傷であった。外科的治療は脱臼骨折例には固定術(前方1, 後方1)を、非骨傷性頸髄損傷例では急性期は保存的治療を原則とした上で外科的治療を4例に施行した。脱臼骨折の1例は、横断性脊髄損傷(Frankel B)で気管切開による呼吸管理を必要とした。非骨傷性頸髄損傷例の予後は良好で全例独歩退院した。

考察：当科では中高年の軽微な頭部外傷に伴って生じる非骨傷性頸髄損傷が多く、頭部外傷診療に際しては頸椎頸髄損傷を絶えず念頭におくことが重要である。

## 10. 肺理学療法が著効した小児肺炎の1例

<sup>1</sup>リハビリテーション科, <sup>2</sup>リハビリテーション医学講座

鷲山眞理雄<sup>1</sup>・西野智香子<sup>1</sup>  
佐藤みち子<sup>1</sup>・西田 有滋<sup>1</sup>  
鈴木 壽彦<sup>1</sup>・林 修司<sup>1</sup>  
小山 照幸<sup>1</sup>・宮野 佐年<sup>2</sup>

はじめに：当院リハビリテーション科では入院患者の早期転退院に主力を置いており、小児科症例でも理学療法が著効を呈し訓練開始後短期間に退院できたケースについて報告する。

症例：平成13年6月6日生。重症肺炎平成14年2月24日より39~40度の発熱、近医で内服もらうも症状改善せず、当院受診。W 8,000, CRP 4.5だったが、抗生剤使用するも軽快せず、3月14日 chest CT 施行。CT 上左下肺野肺炎認められ、ネブライザー等使用しているがデータ改善しないため、3月15日リハビリテーション科に排痰依頼、同日当科受診。翌週、3月17日 PT 開始となる。

経過：3月17日再度、chest CT あり、PT 開始は夕方となる。右腕に点滴、残存肺にて行われる換気量で、1歳児相当のADLはすべて自立。咳、鼻水はほとんど認められない。ただし、両親に対する極端な甘えと白衣恐怖症が認められる。母親

に、コアラ抱っこ状態で背部よりアプローチ。下葉に空気を呼び込み、粘土の強い痰を2~3回移動させ終わる。大泣きしたが咳込み可能となる。

3月19日 X-P 撮影あり。右下葉後底区、側底区には air がはいつている。CRP 0.6 問題があるので、今回は、父親にコアラ抱っこさせ、前胸部にもアプローチした。さらに下葉に空気を呼び込み、終了とした。

以後は、経過観察のみ。

3月20日 熱、37.3°C に下がる。

3月22日 CPR 0.1 に下がる。胸部 X-P 撮影。

3月24日 退院。

4月18日 外来にて、胸部 X-P を撮影。

まとめ：発病以来、他の治療にはほとんど反応しなかったケースだが、肺理学療法には良く反応した。これによるリハビリテーション科の収入は180点×2回=360点だけである。結局、医療費の費用と効果を考えると、非常に安く上がったのではないかと考える。今後は痰の粘性が強くなっていない時期に依頼がなされればさらに早期の退院が可能と考える。

## 11. リハビリテーション科の診療状況

<sup>1</sup>リハビリテーション科, <sup>2</sup>リハビリテーション医学講座

小山 照幸<sup>1</sup>・鷲山眞理雄<sup>1</sup>  
佐藤みち子<sup>1</sup>・西野智香子<sup>1</sup>  
西田 有滋<sup>1</sup>・鈴木 壽彦<sup>1</sup>  
林 修司<sup>1</sup>・宮野 佐年<sup>2</sup>

はじめに：2002年4月に大幅な保険診療報酬改定が行われた。とくにリハビリテーションの分野では全面見直しが行われ、それに伴いリハビリの治療方針、診療体制も変更せざるを得ない部分があり、当科の診療がどのように変化したかを検討した。

対象と方法：2000年4月から2003年9月までの期間に、当科にリハビリ依頼のあった患者を対象とし、年度ごとに群分けした。2003年度は4月~9月までの半年間である。

結果：1日平均患者数は2000年度78.2人、2001年度78.3人、2002年度64.9人、2003年度62.8人と改訂後減少した。物理療法施行者は2000年度10人、2001年度6人、2002年度0.8人、2003年度

0.1人と改訂後大幅に減少した。新依頼者数は2000年度584人、2001年度619人、2002年度680人、2003年度360人と増加傾向にあった。とくに入院患者の依頼が増加していた。依頼科別の内訳は2000年度は整形外科が5割以上であったが、改訂後は3割と減少した。外科と小児科の依頼が増加傾向にあった。疾患別では腫瘍が増加傾向にあり、骨関節疾患が減少傾向にあった。

結語：病院の機能別役割分担化により、当院は急性期病院に分類され、入院期間の短縮化が至上命令とされている。リハビリ部門はなかなか収入とは結びつきづらいが、患者の全身状態の改善、ADLの向上を援助することにより、早期退院に寄与したいと考えている。

## 12. 髓内釘を用いて足関節固定術を行った Charcot 関節の2例

<sup>1</sup>整形外科, <sup>2</sup>東京慈恵会医科大学整形外科

森 良博<sup>1</sup>・窪田 誠<sup>1</sup>  
油井 直子<sup>1</sup>・佐藤 吏<sup>1</sup>  
田邊 登崇<sup>1</sup>・岩崎 幸治<sup>1</sup>  
菊地 隆宏<sup>1</sup>・酒井 伸英<sup>1</sup>  
藤井 克之<sup>2</sup>

目的：今回、我々は、著しい関節破壊を呈した足関節の Charcot 関節に対して、逆行性髓内釘による関節固定術を試みたので報告する。

症例：症例1：50歳、女性。原疾患は明らかではないが、四肢末梢部に優位な知覚障害、筋萎縮を認め、著しい側弯症を伴っていた。右足関節は内反位をとり、短期間に関節破壊が進行して支持性が低下し、歩行が困難となったため手術を施行した。Transfibular approachで距腿関節および後距踵関節の骨・軟骨切除を行い、アライメントを整えた上でフィン付き髓内釘を逆行性に挿入して固定した。比較的短期間で良好な骨癒合が得られ、術後19カ月の現在、屋内では支持なく歩行可能である。症例2：59歳、女性。原疾患は糖尿病性神経障害で、足関節の疼痛と支持性の低下を訴えて受診し、関節破壊が急速に進行したため手術を施行した。距骨下関節の変形は軽度であったため、距腿関節のみの固定術を施行し、速やかに骨癒合が得られたが、活動性が増大すると踵骨内で

髓内釘の loosening を生じ、後距踵関節周囲の疼痛が発生した。髓内釘を抜去すると疼痛は改善したが、術後13カ月の現在、後距踵関節の変形は残存しており経過観察中である。

考察：Charcot 関節では、関節破壊が急激に進行した場合には骨質が不良であることや、固定部に通常より大きなストレスがかかるおそれがあることなどから、従来の固定法では骨癒合に長期間を要したり、偽関節となる可能性がある。本法は従来の関節固定術と比較してより強固な固定性が期待でき、今回の2症例では比較的短期間に問題なく骨癒合が得られ、本症に対する髓内釘による足関節固定術は非常に有用であると考えられた。しかし、症例2では術後に距踵関節に強い影響が出たことから、本法施行時には距踵関節固定術の併用を考慮する必要があるものと考えられた。

## 13. 妊娠を契機に発症した劇症1型糖尿病の1例

糖尿病・代謝・内分泌内科

阿久津寿江・三留 博子  
赤司 俊彦・池本 卓

症例は29歳女性。妊娠6週に感冒様症状と腹痛を認め、抗生剤、胃薬投与の治療を受けたが改善せず、また意識レベル低下と高血糖(744 mg/dl)を認め、2001年3月7日当院へ搬送された。入院時意識レベルJCS III-100、血糖1,641 mg/dl、HbA<sub>1c</sub> 5.9%、動脈血液ガス分析pH 6.98、尿ケトン体(+)から糖尿病性ケトアシドーシスと診断し補液とインスリン持続投与(0.1 U/kg/hr)を行った。しかしながら子宮内胎児死亡を確認し人工娩出術を行った。糖尿病に対しては食事療法1,440 kcal/日と強化インスリン療法を行った。入院時尿中Cペプチドは11.8 μg/day、空腹時CPRは0.31 μg/mlと著明に減少しておりAmy 499 IU/l、PST1 28.0 μg/ml、PL-A2 6,180 μg/dlと膵外分泌酵素の上昇を認めた。ICA抗体、抗GAD抗体および抗核抗体は陰性であり、劇症1型糖尿病が疑われた。また、HLAはDRB1\*0405、DQB1\*0401であり1型糖尿病疾患感受性のhaplotypeをもっていた。分娩後や妊娠中に劇症1型糖尿病の発症が報告されており、妊娠時の免疫系の活性

化により母体の自己免疫疾患が誘発されるためと言われている。今回、私達は妊娠を契機に発症した劇症1型糖尿病と考えられる症例を経験したので報告する。

#### 14. 小腸 GIST の1例

外科 藤本 雅史・梶本 徹也  
小菅 誠・山崎 哲資  
平林 剛・黒田 徹  
遠藤 泰彦

患者は65歳の男性。主訴は腹痛。2003年9月5日に腹痛が出現し、他院に入院して検査を行ったところ腹腔内腫瘍が認められ当科紹介となった。血液生化学検査、腫瘍マーカー（CEA, AFP, CA19-9）には異常はみられなかった。腹部に腫瘍は触知しなかった。腹部超音波検査・CT・MRI検査では、左上腹部に内部構造が不均一で小腸との交通がみられる境界明瞭な12cmの充実性腫瘍がみられた。小腸原発のGIST（gastrointestinal stromal tumor）と診断して手術を施行した。トライツ靭帯から70cmの空腸に10cm以上の壁外性充実性腫瘍が認められ、腫瘍を含めた10cmの空腸を切除した。周囲組織への浸潤、肝転移や腹膜播種は認められなかった。病理組織学所見では、紡錘形腫瘍細胞の錯綜増生がみられ、細胞分裂像は目立たなかった。免疫組織化学検査ではKIT（+）、S-100（-）、Desmin（-）であり、GISTと診断した。5cm以上のGISTは臨床的に悪性経過を辿る可能性が高く、転移・再発に関して経過観察が必要である。GISTに関する最近の知見を交えて報告する。

#### 15. 当科にて入院加療を要しためまい症例の検討

耳鼻咽喉科 久納 浄・添田 一弘  
福田 佳三・茂呂八千世  
内田 亮・辻 富彦

平成13年1月から平成14年12月までの2年間に当科にて入院加療を要しためまい症例の17例について検討した。おもな結果を以下に示す。1) 他医院からの紹介例は皆無であった。2) 初診時に眼振所見を見る例が多かった。3) 高齢者の

例が多い（平均年齢55.7歳）4) 中枢異常症例が判明した例は1例のみ。以上のことより、入院加療を要した症例は強いめまいを自覚したため、近医あるいはかかりつけ医に受診するよりも入院、検査が受けられる当院を直接受診したと考えられた。実際眼振を呈する例が多く認められた。また高齢者の割合が諸家の報告より高い割には中枢性疾患を有した症例は1例のみであった。中枢性疾患を有した症例は1例のみであった。中枢性（聴神経腫瘍）と判明した例について症例を紹介する。また、現在導入している入院中のめまい症例に対する検査方針を提示し、その有用性について検討した。

#### 16. 臨地実習における「ヒヤリ・ハット」現状 —当校における安全教育的検討に向けて—

慈恵青戸看護専門学校 柿澤 玲子・柳原 和代  
栗原 則子・田代 和子

医療事故が増加している今日、看護学生がその当事者にならないとは限らない。医療における「安全性と事故防止」への意識は、基礎教育の中でしっかりと学生自身の中に根付かせていくことが大切である。しかし、現在当校における安全教育的は、基礎看護学を初めとする各教科目での講義と臨地実習開始時のオリエンテーションの中で実施しているが、系統的な教育は行っていない。

そこで今回、小児看護学実習で学生が関与した誤薬が2件発生したことを機に、学生の安全に対する意識づけと現状を把握する目的で、学生が臨地実習の中で経験している「ヒヤリ・ハット」について記述させた。その結果、領域別実習3クールを終了した3年生の24名中38件の「ヒヤリ・ハット」が明らかになった。内容を項目別に分類すると移動に関するもの10件、与薬に関するもの10件、転倒・転落に関するもの5件、清潔ケアに関するもの3件、感染に関するもの2件、その他8件であった。また学生が考えている「ヒヤリ・ハット」の要因は、知識不足、注意不足、状況判断の誤り等であった。とくに状況判断の誤りでは、患者の訴えが強かったり、看護師が不在だった場合に患者との調整がとれず、適切な行動がとれていない状況が明らかになった。

今後、これらの現状を踏まえ、安全に関する認識を高め、適切な対処行動がとれるよう一貫した安全教育のあり方について考えて行きたい。

#### 17. より安全な与薬を目指して誤薬報告書から原因と対策を考える

看護部 加藤由美子・河合 美穂  
佐宗 陵子・中谷みゆき  
荒木 利恵・野口美佐子  
高畑むつみ・甲斐こずえ  
川崎 順子・熊谷 良子  
刈谷 育子・小船八千代

与薬とは、患者の健康の段階に応じて適切な使用量で、最大限の効果が得られるように、医師の指示である処方箋・注射指示票の用法・用量を正しく理解し薬を与え、その後の観察を行い結果を

医師に情報提供するという一連の機能をいう。ベットサイドでは、看護師は最終確認および実施者になり、患者の命を守る・安全を守るという視点にたち、より主体的に正確に与薬を実施することが求められる。そのため医師・薬剤師・看護師がお互いにチーム医療として、出された指示が正確に実施するためという視点に立ち、システム・基準・体制・環境などに目をむけ整えていくことが必要である。看護部でも与薬に関する業務基準や誤薬防止のための対策を講じているが、同様な状況が発生している。

今回は、平成15年4月から9月までに提出された誤薬発生報告を、誤薬発生要因ごとに集計し誤薬の種類・プロセスからみた問題を整理し対策を検討したので報告する。